

わかば会誌

第22号

2025.1

巻頭言

会長就任にあたって

久保医院 久保隆之



新年明けましておめでとうございます。

令和6年6月に河北郡市医師会会長を拝命いたしました。有能であった歴代会長に比べて能力は落ちますが、会員の皆様に不利益が生じないよう努めて参ります。

令和6年は元旦の能登半島地震、9月の豪雨災害と石川県民にとって大変な年となりました。被災で亡くなられた方々に哀悼の誠を捧げ、被災された方々にお見舞い申し上げます。当医師会からは由雄先生、紺谷先生がJMATとして被災地に赴きました。2泊3日で日常診療を休んで協力して頂き感謝申し上げます。河北郡市は金沢以南のように大々的に被災者を受け入れる事はありませんでしたが、親戚を頼って河北郡市に居住することとなった多くの患者様が来院されました。「能登は優しや土までも」の言葉通り、皆さん本当にいい人ばかりだということ実感したところです。それにしても、多くのビルや高速道路が倒壊した阪神淡路大震災や東日本大震災に比べ地理的問題があるにしても復興に時間がかかりすぎている様に思います。国が補正予算を早急に組まなかったからともいわれていますが、国や県は地元民の優しさに甘えることなく復興を加速してもらいたいと思います。河北郡市でも内灘、かほく市で液状化現象のため多くの方が被災され避難生活を強いられました。そのような中、内灘支部の会員の有志の先生方が自発的に輪番で避難所の巡視をされた事に感謝いたします。本来はこのような事態の時に医師会として組織的に行動すべきところでしたが、各地区の被災状況や会員の安否確認も把握することが困難であったため会員各位の自発的行動に頼る事になりました。有事の際の、連絡網の脆弱性は県全体でも問題となったことより、県医師会

より各地区医師会へ会員の安否確認システムを整えるように指示がありました。河北郡市医師会では秘匿性の高い通信アプリ「シグナル」を採用し全会員との連絡網を整えたいと思います。災害時に限らず、日頃からの情報伝達に有用ですので、是非、登録をお願いいたします。

「私たちが生きている今、それは誰かが命がけで守ろうとした未来だった」、この言葉は汐見夏衛氏の小説「あの花が咲く丘で、君とまた会えたら」の一説です。女子高生がタイムスリップして出撃間近の特攻隊員に恋をして気づいて言った言葉です。このフレーズが昨年最も心に刺さった言葉です。映画にもなっていますので、是非、観てない方は視聴されることをお勧めします。戦争と結びつけるのではなく、先人が紡いだ現在を大切に未来に繋ぐことの大切さに改めて気づかされます。医師会会長としてもそのような姿勢で臨みたいところですが、心身がついていかず情けないところです。

ウクライナでの戦争や中東での紛争など世界情勢は混沌としています。アメリカ合衆国大統領に就任するトランプ氏には何とか紛争を鎮静化してくれることを期待します。そのような情勢にあって我が国は大丈夫なのかと不安を感じる方も多いと思いますが、石破総理からはTPOに応じた服装やマナーの大切さを教えられました。医療に携わる者として、TPOに応じた適切な振る舞いの重要性を胸に刻み、地域医療の発展に尽力してまいりましょう。

コロナ渦も収束して令和6年は平穏な年になるように望みましたが、元旦から大変な年になりました。まだまだ、被災地は復興の道半ばにありますが、令和7年こそ、梅花の白さと蘭のほのかな香りを感じられる平穏な1年であることを祈ります。

金沢医科大学小児科学教授就任のご挨拶

金沢医科大学 小児科学 教授

伊川 泰広



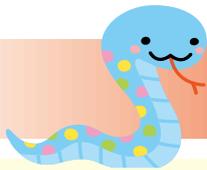
この度、2024年5月1日付で金沢医科大学小児科学教授・科長を拝命いたしました伊川泰広と申します。河北郡市医師会の先生方には、日頃より大変お世話になっております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は2002年に金沢大学医学部を卒業し、金沢大学小児科の関連病院で小児科学全般のトレーニングを行なってまいりました。サブスペシャリティとして小児血液・腫瘍学を専攻し、金沢大学病院を中心に化学療法や放射線療法、造血幹細胞移植に携わってまいりました。小児血液・腫瘍疾患の年間発症数は全国でおよそ2,500例と少なく、成人がんと比較すると希少疾患です。しかし、発熱が長引くお子さんや、発熱の原因がはっきりしない不明熱のお子さんにおいては、常に白血病などの小児がんを鑑別に含める必要があります。小児血液・腫瘍専門医の仕事は、治療だけでなく、適切な検査を進めながら腫瘍性疾患を否定することも重要な役割です。疑わしい患者さんがいらっしゃいましたら、どうぞ遠慮なくご紹介いただけ

たらと思います。

近年、小児がんの治療成績は大幅に向上しています。例えば、小児白血病で最も多いB細胞性急性リンパ芽球性白血病（BCP-ALL）は、5年生存率が90%を超えるようになりました。また、かつては造血幹細胞移植が唯一の治療法であった再発BCP-ALLも、現在では標的治療薬を代表とする新薬の登場により、造血幹細胞移植を回避できるようになりました。造血幹細胞移植は非常に有効な治療法ではありますが、治療に伴う合併症が重篤であるため、長期予後を考慮すると理想的な治療法とは言えません。現在では、化学療法と標的治療薬を併用し、必要に応じてのみ造血幹細胞移植を行う治療戦略が望まれています。私たち小児科医は、50年無病生存率の向上を目指し、身体に優しい治療法の開発に日々努めております。

河北郡市医師会の先生方には、今後とも多大なるご支援とご指導を賜ることになるかと思っておりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。



年 男

開院34年、 71歳を迎えて

沖野クリニック

沖野 栄蔵

平成2年5月7日。私は不安で胸が一杯でした。真新しい白衣。その下にはホワイトシャツにネクタイ。(いつもはポロシャツ) 緊張した面持ちで、午

前9時を迎えました。開院、第一日目です。

開院時私は37歳。結婚して子供も二人(女房のお腹には三人目。最終的には四人)。

「開業して患者さんは来てくれるだろうか…。借金は返していけるだろうか…。従業員、家族を守っていけるだろうか…。」等、あらゆる事に不安を感じていました。しかし走り出してしまったのですから、後はガムシャラ。当時は時間外の電話、診察は当たり前。診察室と住居を行ったり来たり。でもあの頃は若さとエネルギーと髪の毛がありました。

金沢医科大学呼吸器内科長就任のご挨拶

金沢医科大学 呼吸器内科学 教授

井口 晶晴



新年、あけましておめでとうございます。
令和6年5月より金沢医科大学病院呼吸器内科長を務めております井口晶晴（いぐち まさはる）と申します。能登町（旧内浦町）出身で七尾高校、高知医科大学（現高知大学）を卒業後、平成7年に金沢医科大学呼吸器内科に入局しました。その後、大学院や県内外の施設で研修を積み、平成23年から令和6年4月末まで金沢医科大学氷見市民病院にて勤務しておりました。

氷見市民病院では地域住民の方々の生活に密着した診療を心がけ、特に高齢者の慢性呼吸器疾患の管理や在宅医療の病診連携を行ってきました。この経験を通じて、医療従事者や地域の介護スタッフと協力しながら患者さんを総合的に支える重要性を実感しました。

趣味は楽器演奏で金沢市の音楽団体に所属しています。かほく市吹奏楽団の前身にあたる宇ノ気吹奏楽団の演奏会に出演した経験もあり、音楽を通じた地域交流を楽しんでいます。なお妻がかほく市の出身で、義実家近くの桜まつり

には子どもたちが小さいころによく伺っておりました。

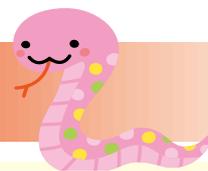
これまで病院勤務医として地域医療と急性期医療の連携を心がけ、特に肺癌やCOPD、気管支喘息などの呼吸器診療をしてきました。また患者さんのQOL向上を考え医療従事者間の連携強化を図ることで、地域医療の質を高められるよう心がけました。

地域医療においては病診連携が欠かせない要素であると考えております。患者さんが最適な医療を迅速に受けられるよう、医師会の先生方との情報共有は重要と思えます。

最後に、まだまだ至らぬ点も多い私ですが河北郡市医師会の諸先輩方のご指導を仰ぎながら日々研鑽を積んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



年 女



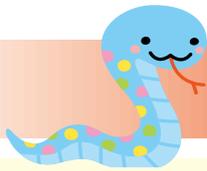
今開院して34年。私は71歳。現在孫も七人いて、正真正銘の「お爺さん」。スマホに送られてきたジイさんの写真を見て、「誰？」と思ったら自分。ショック。すぐに削除。無駄な現実逃避しています。

思い起こせば色々な事がありました。両親の病气、介護。子供の進学、結婚。若い頃はよく夫婦喧嘩もしました。今から思えばお互い忙し過ぎて狂っていた様です（笑）。しかし今はその女房と二人暮らし。毎晩NHK-BS放送を見ながら、酒を楽しんでいます。

こんな私ですが、62歳の時大きく人生観を変える出来事がありました。「男たるもの仕事が一番」と走り続けていたら、倒れてしまったのです。お陰様で一ヶ月で仕事復帰できましたが、この出来事で私は自分の「老い」を認めざるを得なくなったのです。

今は「これからは、ゆっくりゆっくり坂を下るように進んで行こう…。」と思っています。そして「終わり良ければ全て良し」の人生を目標にして、明日も襟のすり切れた白衣を着ます。

自分で自分に「退職」を言い渡すまで…。



年男



6回目の巳年

宇野気医院

高田 充彦

あけましておめでとうございます。新しいお正月を迎えることができました。

昨年は1月1日の能登半島地震で始まり、9月の豪雨被害もあり、新型コロナ、手足口病、マイコプラズマなどと、薬の出荷制限などゴタゴタの1年でした。本年こそは、平穏な年であってほしいと切に願います。今年が6回目の年男となりますが、私の子供の頃の生活は今とずいぶん異なっていました。

私が生まれたのは1953年、朝鮮戦争が7月で休戦協定が成立しています、前年(1952年4月28日)まで、日本はGHQの占領下に置かれていました。

小学校のころは、まだ食料事情が悪かったことは覚えています。昭和40(1965)年の頃(いざなぎ景気の直前)は、米だけは十分食べられました。夕食のおかずは、地元の魚などと味噌汁、漬物などが普通でした。卵や肉を使った料理は、特別のご馳走で、誕生日のお祝いはオムライスかカレーライスでした。冷蔵庫そして、洗濯機が我が家に来たのも小学生の頃、それまでは、母がたらいと洗濯板と石けんでゴシゴシ

洗っていました。

田舎ではトイレもくみ取りが一般的で、畑の肥料は糞尿、この匂いが田舎の香水と呼ばれていました。もちろん夏は、ハエが生活の中にいつもいました。交通手段は蒸気機関車か、ディーゼル機関車で、蒸気機関車は、窓を開けるとススや煙がどんどん入ってきます。(トンネルに入るときは一斉に窓を閉める光景を覚えています)。

その頃の娯楽No 1は白黒映画で、映画館は、立ち見の人も多くいました。暑いときは、扇子で扇ぎながら見ていました。白黒テレビが家で見られるようになったのは、1964年の東京オリンピックの前の頃、相撲は若乃花(先代)、大鵬。プロレスの力道山、アントニオ猪木。野球は巨人・アンチ巨人の時代でした。音楽はトランジスタラジオで聞いていましたが、円盤レコードをステレオで聞くことが憧れでした。

さて、現在は、スマホなど、簡単に動画が見られる時代、待合室でも多くの親御さんが子どもに動画を見させています。視機能や発達、学習生活への影響や、ゲーム症(障害)などいろいろな支障が問題になっています。また、SNSの問題も多く報じられています。温暖化の問題にしろ、いくら便利な世の中になっても、不都合なことはなくなるもののようなのです。次の巳年ではどうなっているか?私がいるとは限りませんが心配です。



還暦を迎えるにあたって

村田医院

院長 村田 健

新春の候、河北郡市医師会の会員の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。日頃より医療の発展に多大なるご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

私の医院は、昭和38年に内灘町大根布で先代が開業し、地域医療の一端を担ってまいりました。そして25年前、私が院長を引き継ぎ、以来、地域の皆様とともに歩んでまいりました。この度、2025年3月に還暦を迎えるにあたり、これまでの医師としての歩みを振り返り、改めて思うところがございます。

金沢医科大学病院救命救急科に勤務していた頃は、多くの重症患者を診療する日々でした。その経験は、医師としての迅速な判断力と責任感を鍛えるとともに、命の尊さを深く実感するものでした。地域医療の現場に身を移してからは、患者様の生活背景を理解し、信頼関係を築くことの重要性を強く感じています。一人ひとりの患者様に寄り添い、安心と信頼を提供することが私の使命であると考えています。

これからも医師会の一員として、会員の皆様と協力しながら、地域に根付いた医療を推進し、地域住民の健康を守るために努力してまいります。医療環境が日々変化する中で、柔軟に対応し、住民にとって安心できる医療体制を築いていくことが重要だと思えます。

結びに、会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ、本年も医師会活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。



還暦を迎えた朝

ペンネーム

ふじたたくや

還暦を迎えた朝、休日であった拓也は、寝室のカーテンの隙間から差し込む朝陽で目を覚ました。カーテンを開けて中庭をのぞくと、4歳になったばかりの孫が芝生の上を無邪気に駆けずり回っていた。「還暦か・・・」そう呟いた瞬間、ふと、30数年前の出来事が鮮明に蘇ってきた。

それは整形外科医になって4年目の出来事だった。ある日突然、教授から翌年の整形外科の全国学会で、教授のライフワークである脊椎腫瘍手術について病理学的な検討を加えて発表するように言われた。一瞬、耳を疑った。当時の拓也にとって学会発表といえば、中部日本レベルでの学会発表の経験しかなく、専門性の高い全国学会で発表するなんて想像すら出来ないことであった。しかし教授命令である以上、従うしかない。それから数か月間は、臨床の傍ら深夜まで資料集めやスライド作成など学会準備に追われた。しかし、やはりこんな私にできるのだろうか、教室に恥をかかせてしまうのではないだろうか、と常に自問しながら不安で押し潰されそうになっていた。そんなある日、廊下でたまたますれ違った教授は「この発表は、石にかじりついてもやりきるように！」と強い口調で言い放った。その瞬間、拓也の周囲からすべての音が消え、時間が止まった。「石にかじりついても・・・」。ただその音だけが頭の中で共鳴していた。そして、どれだけの時間が経ったであろうか。気が付くとそこには、前を見据え覚悟を決めた拓也が立っていた。「絶対やり遂げる、絶対やり切ってみせる！」。それからの数か月間は、まさに不眠不休、一心不乱に学会準備に没頭した。

そして学会当日。シンポジストとして壇上に上がった拓也は、緊張からか両足が小刻みに震

えていた。しかし、なぜか顔には自信に満ち溢れた表情があった。10分間の発表が終わり、その後全体討論へと進み、それらの役割を完璧にこなしてシンポジウムを終えた。「やり切った！」。拓也は、達成感に包まれながら静かに壇上からおりた。そこには教授が待ち受けており、「良かったぞ」と笑顔で出迎えてくれた。

この経験は、その後の拓也の医師人生において、大きな精神的支柱となった。治療に難渋する患者さんと向き合った時、論文の書き直しを何度も指示された時、手術中に前進するか撤退するか決断を迫られた時、いずれの時も、「石にかじりついても・・・」の言葉を反芻しながら自分自身を奮い立たせることで、全力でやり切ってきた。

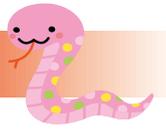
昨今、若手医師の間で働き方改革やパワハラ防止というフレーズが浸透しつつある。しかし、拓也はこのフレーズを聞くと複雑な心境に陥る。確かに、過重労働や過度な心理的負担を背負わずことは絶対避けなければいけない。しかし、医師として人の命や人生を預かっている以上、全身全霊をかけて患者や仕事に向き合い、最後まで「やり切る」という姿勢は非常に重要ではないだろうか。働き方改革に重きを置くばかりに、医師として覚悟や責任感が生まれる土壌が失われているのではないかと危惧しているのがあった。

とは言うものの拓也も還暦を迎えた。石にかじりついてもでも必死に仕事に没頭するだけの人生から、少しスピードを落として周りを見渡し、すべてに感謝しながら、ゆっくりと人生を歩む時期に来ているのかもしれない。

「おじいちゃん！ こっち来て」、孫の声で我に返った。空を見上げると、第二の人生を祝福するかのよう、青空から眩いばかりに輝く朝陽が拓也の顔を照らしていた。



年男・年女



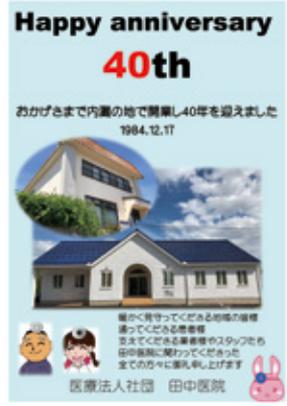
新年挨拶

田中医院

田中 妙子

皆様、明けましておめでとうございます。昨年は令和6年能登半島地震に始まり、秋の大雨被害と多くの災害に見舞われた大変な一年となりました。こうして皆様と新しい年を迎えることができ、大変うれしく思います。改めまして被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。

私は内灘町にある医療法人社団 田中医院で耳鼻咽喉科の診療をしています。当院は昨年2024年12月17日に開院40周年を迎えました。父が1984年に開院した、この小さなクリニックで、現在、素晴らしいスタッフに恵まれ、日々、診療できることに感謝しながら地域医療に従事しております。



40周年ポスター



医師会館
理事会室にて

ご縁があり、2020年から河北郡市医師会理事、2022年から石川県医師会理事を拝命しました。県理事会に参加し、郡市の先生方に多く還元できるように本年も精進したいと思います。



県庁 災害本部前にて

2024年を振り返りますと、1月JMAT活動として石川県庁の災害本部内にある石川県JMAT本部の出務があ

りました。河北郡市の先生方には避難所の診療ボランティア、ならびにJMAT活動にご尽力いただき、誠にありがとうございました。

私事で10年前から取り組んでいるヘアドネーション。4年半かけて伸ばした髪を2024年3月に寄付しました。髪は長ければ長い方が喜ばれるとのこと、記録45cmでした！小児がんで髪を失った子供たちに素敵なお供えが届けよう願っています。



冬、髪を切る前 斎藤本部長と

大好きな先生方とのツーショット写真で髪の長さを振りかえります。これから5年間、頑張っ伸ばします。



夏、県医師会の兄 牧本先生
(ヘアドネーション仲間)と



春、県医師会の父、
上田元副会長と



秋、敬愛する長尾先生と

2024年、新たに医師共同組合、石川県医師国保の理事を拝命しました。今まで気づかなかった医療を取り巻く様々な環境を知る機会となり、日々、勉強させて頂いています。

本年もどうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。

私のセミリタイア

石倉クリニック
石倉 直敬

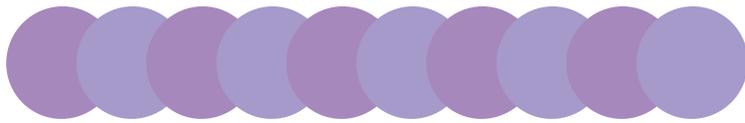


明けましておめでとうございます。

津幡町の石倉クリニック非常勤の石倉です。近況報告をという事で、私にとってビッグイベントであったセミリタイアについて述べたいと思います。一般的にセミリタイアとは、ある程度の資産を確保した上で仕事を早期退職した後、自由な時間を確保しながら生活に必要な分だけ仕事をするライフスタイルだそうです。開業医には定年は無いので健康であればリタイアあるいはセミリタイアするのは通常は70歳台以降かと思われます。私がセミリタイアしたのは60歳台ですから、いささか早かったかと思います。実際、その当時の私に早期退職する予定など微塵も無く、とりあえずは75歳位までは働こうと思っていました。しかし、ひょんな事から自分の健康寿命が予想外に短かそうだと判り、このまま働いていたらセカンドライフが危なくなるかもしれないので、急遽決めた言わば強制的セミリタイアです。その際の問題の一つがクリニックの承継ですが、息子が協力的で尚且つ、当時、彼が在籍していた金沢医科大学皮膚科学教室のご理解もあり、スムーズに継承できました。そして、令和5年7月末でクリニックの理事長・院長職を辞し、非常勤となりました。セミリタイアの開始です。診療時間は週8時間と激減しました。一方、増えた自由時間が何に使われたかですが、大した事はありません。先ずは家事に費やす時間が格段に増えました。家に居るだけで何もしないお荷物にはならず済んでいます。体力維

持にもかなり時間を割いていると思います。それによって、健康なセカンドライフを長く享受できる事を期待しています。小一時間のストレッチや筋トレ、ゴルフ関連の練習およびラウンド、他にも週1のテニスレッスンや、多い時は週2の河北郡市医師会のテニス同好会での練習、月2くらいのパーソナルジム、日々の小規模家庭菜園など、いろいろ手を出しています。そして、やりたいと思いながら現実には少ししかできていない事として、夫婦での旅行があります。これも、元気なうちに、どんどん実行に移していきたいと思っています。最後に、敢えて申せば、現時点では何らの社会貢献的な活動もしていないという後ろめたさが、心の片隅にある気がします。これも、セカンドライフの中で解決していきたいと思っています。





中田内科病院

中田 滋

先日、高校の同窓会に行ってきました。学年不問の高校全体の同窓会、同学年のみの同窓会、今年は双方とも参加してまいりました。

不問同窓会はいつもながらの盛大な同窓会でして、人の多さに圧倒されながらも同学年でも昔から親しい友人とだけ当たり障りのない話をしてご飯を食べて帰ってきました。

同学年の同窓会では今でも交流のある友人とだけ話をして、ああいつもの同窓会だなあと。ただそこでいつもと違う会話が。「もう先は長くないんだから好きな事しないとね！」

その言葉を聞き、え？と一瞬感じつつも、と同時にそうだよなあとも感じました。今までは余生のことをほぼ考えていませんでしたが、最近考えるようになっていたのです。

今まではほんやりとしか考えていませんでしたが、今年かほく市が催されたアドバンスケアプランニング（ACP）についての会に出席させて頂き、ほんやりからちょっと現実味を帯びたものになっていたのです。ACPは、正直今迄は仕事上、患者さんのものという認識でした。それを自分のこととして考えるようになりました。今後の仕事のこと、今の生き方のこと。

その少し前にも余生のことを考えさせる出来事がありました。新型コロナウイルス禍です。こちらは厳密には余生を考えさせられたというよりも価値観の変化、生き方の見直しが起こりました。コロナ禍の影響は人それぞれだったのでありますが、わたしの場合は

かなりと申しますか恐らく人生最大の出来事であり、一生のお願いレベルの出来事でした。

中学受験（落ちた）、高校受験（受かった）、大学受験（落ちた）、医師国家試験（受かった）、就職（試験無しだったので受かった）、開業（病院継承）、いずれの出来事よりも心の受けた影響は大きかったような気がします。わたしは戦争を知らない大人たちの一員ですが、おそらく戦争レベルの緊張感でした、コロナ禍は。

そんな出来事を経て、服の趣味の変化、今年人生初のウエイクボード（サーフィンみたいなやつでボートとかに紐でひっぱってもらうスポーツです）を経験しました。近日中に、今までオリンピック頻度以下なゴルフ再開と人生初スノーボード、もしてみる予定です。前置きの割には大した変化ではないですね。仕事の面でも考え方は少々変化しておりますがそれを具現化するまでは至っておりません。ですが追い追い実現してゆこうとは思っております。

とりとめのないことを思いつくままに書いてみました。これをエッセーというのでしょうか。拙稿ですが以上です。今後ともよろしく願いいたします。



質の高い医療と円滑な地域連携を目指して

金沢医科大学病院 地域医療連携部

部長（副院長） 佐々木 洋（眼科）
副部長 兼氏 歩（整形外科）
副部長 土谷 武嗣（心血管カテーテル治療科）
副部長 水田 秀一（総合内科）

こんにちは！金沢医科大学病院の地域医療連携部です。

本院の地域医療連携部は1994年に開設され、今年で30年目になります。地域医療連携部長のもと、地域医療連携部副部長として医師3名、看護師20名、ソーシャルワーカー6名、事務18名の多職種チームで担当しています。

地域医療連携部の役割は「前方連携」と「後方連携」です。「前方連携」は患者さんの受診・入院時の連携、「後方連携」は退院後の生活支援における連携です。「連携事務担当」は紹介予約・各種照会の窓口、「入退院支援担当」は患者さんの入退院支援や訪問看護等サービスの調整、「医療福祉担当」は病気や障がいによる生活上の相談に関する業務を担い、患者さんをサポートしています。各担当が専門性を活かし、患者さんのスムーズな受診・入院、退院・転院のアシスト、患者さんと医療機関、行政・介護・福祉・調剤薬局等関係機関をつなぐ役割を担っています。

地域医療連携部のミッションは「病病連携・病診連携の促進」と「患者さん・ご家族へのサービ

スの向上」です。

特定機能病院である本院では各分野の専門医・指導医が的確な診断と最先端の治療に取り組むとともに、医療の進歩に貢献するべく多くの基礎・臨床研究を行いその成果を発信しています。病診連携では地域の「かかりつけ医」との役割分担や密な連携が重要になるので、地域医療連携部が地域の先生方や患者さん・ご家族と金沢医科大学病院との架け橋としての役割を果たしていきたいと思えます。サービス向上に向けては、喫緊の課題である待ち時間短縮のため、地域医療連携部が中心となり、予約制外来診療体制の拡充、各種相談窓口業務の効率化、入退院予約センターの人員増などに取り組んでいるところです。

当院にご紹介いただきました患者さん・ご家族が安心してご満足いただける医療を受けられるよう「親切」「丁寧」「誠実」をモットーに信頼される医療連携を心がけていきたいと思えますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。



連携事務担当スタッフ



入退院予約センタースタッフ



患者相談支援窓口・医療福祉担当スタッフ



入退院支援担当看護師

1. 理事会・総会

令和6年 1月17日(水) 第10回理事会
 令和6年 1月20日(土) 令和5年度新年総会
 (懇親会中止)
 令和6年 2月21日(水) 第11回理事会
 令和6年 3月19日(火) 第12回理事会
 令和6年 4月17日(水) 第1回理事会
 令和6年 5月15日(水) 第2回理事会
 令和6年 6月 1日(土) 令和6年度定時総会

令和6年 6月19日(水) 第3回理事会
 令和6年 7月17日(水) 第4回理事会
 令和6年 8月21日(水) 第5回理事会
 令和6年 9月18日(水) 第6回理事会
 令和6年10月 7日(月) 石川県医師会との懇談会
 令和6年10月16日(水) 第7回理事会
 令和6年11月20日(水) 第8回理事会
 令和6年12月18日(水) 第9回理事会

2. 学術研修会

河北都市医師会学術講習会

令和6年3月13日(水)
 演題：「認知症の臨床診断と治療」
 講師：金沢医科大学 脳神経内科学 臨床教授
 濱口 毅 先生

令和6年4月10日(水)
 演題：「肝・腎機能に配慮した高齢リウマチ患者の診療」
 講師：金沢医科大学病院 血液免疫内科学
 臨床教授 川野 充弘 先生

令和6年5月8日(水)
 演題：「救急外来におけるCOVID-19診療」
 講師：金沢医科大学 救急医学講座 講師
 牛本 知孝 先生

令和6年5月22日(水)
 演題①：「慢性腎臓病患者への栄養指導の取り組み」
 講師：金沢医科大学 栄養部栄養課 課長
 竹下 欣吾 先生
 演題②：「慢性腎臓病患者診療のエリアとの連携」
 講師：金沢医科大学 腎臓内科学 准教授
 藤本 圭司 先生
 演題③：「CKDの課題と対策-SGLT2阻害薬の現状」
 講師：金沢大学 腎臓・リウマチ膠原病内科学
 教授 岩田 恭宜 先生

令和6年6月12日(水)
 演題：「上部消化管疾患～最近の話題～」
 講師：金沢大学附属病院 消化器内科
 内視鏡センター長・病院臨床教授
 鷹取 元 先生

令和6年7月10日(水)
 演題①：「糖尿病と整形外科疾患の関連」
 講師：金沢医科大学 整形外科学 助教
 小野地 雄貴 先生

演題②：「糖尿病早期治療におけるツイミープの
 ポジショニングとは？」
 講師：金沢医科大学 糖尿病・内分泌内科学
 教授 熊代 尚記 先生

令和6年9月11日(水)
 演題：「関節リウマチの最新の話題と医療連携」
 講師：金沢医科大学 医学教育学 特任教授
 山田 和徳 先生

令和6年10月9日(水)
 演題：「2型糖尿病の私が考えるチルゼパチドの使い方」
 講師：福井中央クリニック 院長
 笈田 耕治 先生

令和6年11月13日(水)
 演題：「超高齢化社会を迎えた便秘症診療
 ～便通異常症診療ガイドラインを踏まえて～」
 講師：横浜市立大学 肝胆膵消化器病学教室
 医学部長 中島 淳 先生

令和6年12月11日(水)
 演題：「当院における乾癬治療対策」
 講師：金沢医科大学病院 皮膚科 准教授
 竹田 公信 先生

「救急医療週間」研修会

令和6年9月12日(木)
 演題：「能登半島地震 災害医療について」
 講師：社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院
 理事長 神野 正博 先生

河北都市医師会 産業医・生涯教育研修会

令和6年10月24日(木)
 演題：「特殊検診と化学物質管理法改定」
 講師：(株)小松製作所本社健康増進センター
 栗津健康管理室長 南 昌秀 先生

編集後記

多忙な中、寄稿いただいた先生方に感謝いたします。金沢医科大学病院より2名の新任教授、地域連携室より寄稿頂きました。医科大病院との連携が益々良好になる事を期待します。藤田先生が危惧する医師の働き方改革の問題点は皆さん共有しているところだと思います。72歳の年男の沖野先生、高田先生の文章はノスタルジックで、宇野気駅の近くに映画館があって父と座頭車を観たことや、自分の開院当初のこと

を思い出しました。セミリタイヤされた石倉先生は悠々自適の生活を満喫していると思いきや、これからは社会貢献的な活動もしたいという姿勢に頭が下がります。昨年は自然災害の怖さを思い知らされた年でした。昨年の救急の日に恵寿総合病院の神野理事長に講演して頂き、震災前から災害に備えて、震災の時にも医療を止めなかった事に感銘を受けました。今年は災害が無いことを願いますが、災害があった時に地域貢献できる体制が整えられればと思います。

久保 隆之